

55.

私の恩師虚子は、俳句は存問であると言われました。

存問という語が聞きなれないので広辞苑を調べたら、安否を問うこと、慰問することとあるのですっきりしたのであります。

つまり挨拶する我々のその態度は相手を心に引き止めようとしします。見逃すことではないのです。

俳句を作るとき自然という対象に必ず接しますが、自然に向かって安否を問うという親しみをもっていないと、自然はあたたかく私たちに近づいてまいります。

自然の諸相があげひろげに許されたとき俳句が生まれしかも新しい発見を拾いものに授かります。

自然を征服するとはいかにも勇ましく見えるが、自然のほうが抵抗するので、人間の増上慢によって失敗します。

流れゆく大根の葉の早さかな 虚子

漬物などにする大根引の頃の冬の田園風景を見ると、すぐ自然の冬のさまざまが連想される。俳句は存問であることを同感せずにはなりません。

56.

俳句はわずかに十七音しかない文学なのです。

小説のように人情の葛藤を網羅することは不可能と理解すれば、複雑なものを避けて最も簡単率直であるものに興を感じてそこに重点を置くという方針が適当であることを会得するでありましょう。

そこでわれわれ日常に使う挨拶が俳句に取り入れやすいと思います。

挨拶というのは相手と出会うときに表現する会釈で、相手に好感を示すものなのです。これは風土に対し生活に対し自他お互いに平和な気持ちを感じることではないでしょうか。

簡単に短い言葉で用が足りる。クリスマスが近づきました。お子たちも喜んでいらっしゃるか存じまして…と申しますと、もう時候のことも伝わるので、こういうところに俳句の基本があるので。しかし文学としては概念にとらわれず、自分の誠から生まれる言葉によって近しさを創ってゆかねばなりません。

57.

これからしばらく季語を解説してゆこうと思う。

季語は俳句において重要な役目を負うものである。エネルギー源と見るべきものである。

去年今年——とは除夜から新年になったばかりの感じを言う。「去年とやいはん今年とやいはん」と言われるごとくその境目の気持ちに初々しいほやほやの新年が生まれる。

去年今年貫く棒の如きもの 虚子

嫁が君——新年は目出度いから縁起を良くするために言い換える。これはねずみを嫁が君といい換える。

嫁が君出て貧厨のめでたさよ 狐峰

御降——おさがりと読む。元日に降る雨をいい換えた。雨は縁起良くないという理由。雪も御降に加えてよし。

御降の祝儀に雪もちらりかな 一茶

粥柱——餅は新年である。その餅を入れた七草粥とかあずき粥とかの場合に粥柱と言う。

天われにこの寿を賜う粥柱 風生

七草粥——七日の朝薺を刻み込んだ粥である。十五日はあずき粥である。

薺粥箸にかからぬ緑かな 蝶衣

2024.03.07